

「めぐる季節」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

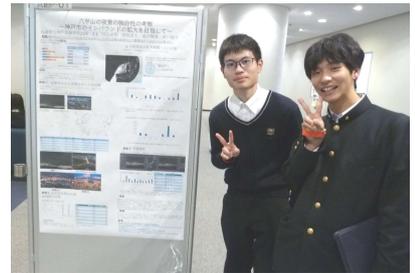
○ 探究的な学びの意味

年月をかけて取り組んできた探究が総まとめの時期となっています。校内での発表も熱気あふれるものとなりましたが、くわえて全県レベルでも先月末には理数系に特化した「サイエンスフェア」があり、その様子については43号でお伝えしたとおりです。

さらに、今月半ばには人文・社会系から文理融合分野まで幅広く網羅した「探究活動研究会の発表会」があり、本校からも2班が発表の機会をいただきました。

結果、2年3組の川口くん、岡田くん、森川くん、中川くんの班が「六甲山の夜景の独自性の考察」で兵庫県教育委員会賞を射止めました。いい笑顔です。

人前で発表すると、学びはより深まります。特に質疑応答の時間は大切です。あらためて自分の解らなかつたところが明白となり、さらにあらたな「問い」が生まれるからです。過日、「探究的な学び」についての講演を依頼された私は、その点について左下のようにまとめ、話をしました。



私が考える「探究的な学び」の長所

「問い」を「問い」のまま抱え込む時間ももちろん大切。

とは言え「知る」ことによって、

「今までは答えを知らなかつた自分」を知ることは大切。

「ひとつの答え」がまた「新たな問いかけ」を生み出すと知ることは大切。

「自分のいるココ」だけが「世界のすべて」だと思わなくなることは大切。

そして「探究的な学び」によって、

「正解のない問い」があると知ることは大切。

「正解を見つけれない自分」を知ることも大切。だから人は「知りたくなる」。

→ そもそも「学び」とは「好奇心、疑問」から始まり、

「答えを発見した驚き、感動」で完結するもの。

★ 「驚きと感動」があつてはじめて「知識」は「学び」として定着する。

世界は「正解のない問い」に溢れています。それでも私たちはいつも答えを選択しながら生きています。

ケンブリッジ大学のバーバラ・サハキアン教授の研究によると、人間は1日に約35000回、何かしらを選択し決断しているとのこと。つまり、今の自分はその作業を繰り返した末に辿り着いた自分なんですよ。

山道を歩きます。その一步一步、何処に足を運ぶのがよいか。五感を研ぎ澄ませながら、私たちは決断し、進みます。時には判断を誤り、バランスを崩すことも

あります。足を滑らせ、転倒することもあります。でも、再びまた立ちあがり、歩き出せばそれでいいのです。そしてそれはおそらく、生きることと同じです。つらいこと、苦しいこと、これまでにたくさん経験しましたね。でも何とか乗り越え、再び歩き始めたからこそ私たちは今、ここにこうして在るのです。

そう考えると、今週末に卒業式を控える78回生の皆さんと保護者の方々には「よくぞここまで」の思いがありますよね。先日は78回生の生徒の1人が校長室を訪れてくれました。海外の大学への進学がすでに決定したのですが、その出願の際に提出する各種書類に、私が承認のサインをしたことへのお礼とのこと。くわえて、『校長の窓』、私も愛読していますけれど、おかあさんも楽しみにしているんです。そのことも『校長先生に伝えといて』って頼まれてまして…」とのこと。ご家族の繋がりに役立てたのは嬉しいですね。

さて、前任校の1年で50枚書いた通信。引き継ぎの際に西田校長先生から『校長の窓』に通信を載せてくれたら…」と依頼されましたが今年も50枚書くことができそうです。これは78回生のお蔭でもあります。

4月 合唱部の『きみ歌えよ』と華道部のイエローボール、そして六甲宿泊登山での世話係の凜々しさ。

5月 文化部がさんざん光を灯してくれた文化祭と運動部が清々しさを見せつけてくれた春季定期戦。

6月 探究活動での数多の受賞と馬術部や山岳部の全国総体出場、野球部と水泳部も眩しかったですね。

また、自治会や吹奏楽部には何度も目を惹きつけてもらいました。加えて9月の『サリマライズ』大合唱。

多種多様な煌めきを放ちながら、めぐる季節を言葉にすることで通信を綴り続けることができました。ありがとうございました。78回生の晴れ舞台を感謝の念とともに迎えることとなる校長はきっと幸せです。